



大阪府立大学創基 130 年記念事業



日本地質学会第 119 年学術大会 市民講演会

# 地震・津波・地盤災害 ～知ること、伝えること～

日時：2012年9月16日（日）14:30-17:00（開場 13:30）

会場：大阪府立大学なかもずキャンパス Uホール白鷺

主催：一般社団法人日本地質学会・公立大学法人大阪府立大学

## 「将来の地震津波災害にどう備えるか

### ～過去の巨大地震大津波からの教訓～

金田義行氏（海洋研究開発機構）

## 「内陸地震はどうして起こるのか？」

飯尾能久氏（京都大学）

## 「近畿の地盤特性と地震時の挙動」

三田村宗樹氏（大阪市立大学）

\*市民講演会の前後各1時間に会場エントランスホールにおいて  
「市民向けポスター展示説明会」を行います。



大地震両川口津波記石碑（大阪市浪速区 大正橋東詰）  
安政南海地震（1854年）では、大阪市内の川に沿って  
津波が押し上り、甚大な被害を受けた。それを後世に伝え  
るために翌年建立された。

■参加費無料。どなたでもご参加いただけます。申込不要。

■お問い合わせ：

email: ishii@p.s.osakafu-u.ac.jp 電話: 072-254-9729 (石井和彦)  
<http://www.osakafu-u.ac.jp/event/2012/20120916.html>

■会場へのアクセス

◎南海高野線「中百舌鳥」駅および地下鉄御堂筋線「なかもず」駅（5番出口）より南東へ、約1000m。

◎南海高野線「白鷺」駅より南西へ、約500m。

◎南海本線堺駅、JR阪和線三国ヶ丘駅から南海バス（北野田駅前行31、32系統、堺駅から約24分、三国ヶ丘駅から約14分）に乗車し、府立大学前下車。  
※駐車場はありませんので、電車・バス等をご利用ください。

後援：大阪市教育委員会、堺市教育委員会、大阪府、大阪市、堺市、  
NHK 大阪放送局、毎日新聞社、読売新聞大阪本社、朝日新聞社、  
一般社団法人全国地質調査業協会連合会、関西地質調査業協会

「市民講演会」は、平成24年度科学研究費補助金研究成果公開促進費補助事業です。



## 「将来の地震津波災害にどう備えるか ～過去の巨大地震大津波からの教訓～」

金田義行氏（海洋研究開発機構 技術研究統括 地震津波・防災研究プロジェクトリーダー）

2011年3月11日の東日本大震災は、近代日本の最大級の海溝型巨大地震・大津波災害でした。M9巨大地震に伴う大津波の襲来により引き起こされた甚大な広域な地震津波被害。この東日本大震災の教訓をどのように活かすか？特に再来が危惧されている南海トラフ巨大地震大津波への備えは、今後の地震津波減災課題の喫緊の課題です。内閣府の南海トラフ巨大地震津波の新想定が公表され社会的な関心を集めています。各自治体においてはその対策がいろいろな観点で検討されています。本講演では、南海トラフ巨大地震津波研究と対策における「温故知新」と「居安思危 思則有備」の現状と展望を紹介します。

講師紹介：東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。石油公団石油開発技術センター、株式会社大林組技術研究所などを経て現職。理学博士。主な著書に「先端巨大科学で探る地球」（東京大学出版会、共著）。

## 「内陸地震はどうして起こるのか？」

飯尾能久氏（京都大学防災研究所地震予知研究センター長 教授）

ある内陸の断層において大地震が起こる頻度は数百年から数万年に1回程度です。めったに起こりませんが、もし発生すると、阪神・淡路大震災のような被害を及ぼす恐れがあります。近畿地方には多くの活断層があり、上町断層など大地震の発生確率が他に比べて高いものがいくつも存在します。しかし、現在の予測の精度は、明日にも大地震が起こるかも知れないが、千年くらい先かもしれないという程度です。予測の精度を上げるために、内陸地震がなぜ起こるかを明らかにすることが重要です。断層直下の柔らかい領域の変形により直上の断層がひずむことが、内陸地震の基本的な発生過程であるという作業仮説が提案されています。この柔らかい領域の実体を明らかにすることが、発生予測の鍵となるものと考えられます。

講師紹介：京都大学大学院理学研究科博士後期過程中途退学。京都大学理学部、東京大学地震研究所などを経て現職。理学博士。専門は地震学、特に内陸地震の発生過程と発生予測の研究。主な著書に「内陸地震はなぜ起こるのか？」（近未来社）。

## 「近畿の地盤特性と地震時の挙動」

三田村宗樹氏（大阪市立大学大学院理学系研究科 教授）

近畿地方は、多くの活断層が存在し、山地と低地が箱庭的に分布する地域です。大阪平野、京都盆地、奈良盆地、近江盆地は第四紀の地殻変動を受けて沈み込み、そこには未固結堆積層である第四紀層が厚く分布します。これらの第四紀層は地震波を增幅させ、その分布地域となる低地部に大きな地震動をもたらします。特に沖積低地表層を構成する沖積層はその傾向が強く、液状化被害の大きな要因ともなっています。さらに、都市域とその周辺には人工的な地盤が構築され、地震時の多様な被害を拡大させています。このような事例を示しながら、本講演では、近畿で共通する地盤特性と地震時の地盤に関わる災害について紹介します。

講師紹介：大阪市立大学大学院理学研究科前期博士課程修了。川崎地質株式会社などを経て、現職。博士（理学）。専門は都市地質学。主な著書に、「人類紀自然学」（共立出版、共著）、「都市の水資源と地下水の未来」（京都大学学術出版会、共著）。

同じ会場にて、以下の地質学会公開シンポジウムを開催します。

9月16日（日）9:00～12:00 「上町断層の地下構造と運動像—都市域伏在活断層の地質学—」

9月17日（月）9:00～12:00 「西日本の海溝型地震と津波を考える」